

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成25年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	PhD プロフェッショナル 登龍門	申請大学名	名古屋大学
申請大学長名	濱口 道成		
プログラム責任者	山本 一良		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム担当者が熱意を持って取り組んでおり、本プログラムの正規学生に合格した大学院生も本プログラムの主旨に合致した積極的な姿勢を見せている。 ・日本人学生が留学生より少なく工学系は一名と、ややバランスを欠くものの、全体としては順調に実施されている。 ・東海地区の特徴を踏まえ、日本のものづくり再生に資する人材、高度な専門性・広い視野を持ち名古屋大学の強みを活かしたフロンティアアジアを活躍の場とする職業人(PhD プロフェッショナル)を養成しようという目標は大いに期待される。 ・学位プログラムについて、トップリーダーとのディスカッションセッションに向け、各界の錚々たる方々を揃えている点は学生たちの刺激になることを期待したい。 ・組織・マネジメント体制などについて、本年度後期からの実施に先立ち、試行学生として研究アシスタントを雇用し、コースワーク、英語教育、海外研修の各試行等を行い、研究アシスタントからレポートを提出させ、本実施に向けた準備を行っている点は評価できるが、学生の意見を多面的に分析評価し、本計画に反映させることは未だ行われていない。 ・正規学生の採用試験を終え、日本人7名、留学生8名の採用となった由であるが、1名の辞退者がでたとは言え、もう少し日本人が多かるても良いのではなからうか。また工学系が一人というのも多様性という意味でも懸念が残る。 <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特にものづくり再生に資するオールラウンド型人材育成を目指しているのであるからもう少し工学系の学生の受入を増やし、文系理系の学生同士が議論しそれぞれの発想の仕方などの違いの認識とともに将来のネットワーク形成につながるような仕掛けが望ましい。プログラムの分野の構成まで含めた理想の学生獲得のPRに工夫と資金を入れることが望ましい。また、大学院生が本プログラムに参加することについて、教授クラスだけでなく助教を含めて大学全体として一層の理解を得る必要がある。 ・オールラウンド型人材も深い専門性に裏打ちされてこそ、新しい分野を切り開くことができる。コアにフィードバックしていく気概でスポーク活動を行うことも重要であり、専門は各研究科任せではなく、その先生方も本プロジェクトに参画させることが望ましい。 ・コースワークとして本プログラムで実施している著名な人の講演や博物館見学など様々な取り組みを通じて、どのような能力を身につけさせるのかについて、概念では説明されているが、より具体的にグローバルリーダーとして必要な、問題発掘、課題提言力や複雑な課題解決時に必要な決断力などを養成していくためのカリキュラムを明確にしてもらいたい。そのためには学生自らが主体的に考え、挑戦し、壁にぶつかっても突破するようなものが欲しい。例えば、海外研修についても、申請書に記載されているように、大学院生に自主的な計画を作成させることも必要である。 			

- 研究アシスタントからのレポートや企業の方々からの積極的な発言を直ちにプログラムに反映させるシステム作りが望まれる。これが今回、見られなかったのは、一つには、本プログラムへの取組が、プログラム担当者の内の一部の教員に集中しているためではないか。申請書に記載されているプログラム担当者全体として本プログラムへ取り組む体制を早期に構築することを期待したい。
- 本プログラムに参加する大学院生同士のコミュニケーションを日常的に活発化させるとともに、本プログラムの取組に参加していない大学院生との交流を活発に行うことで大学全体の教育改革に波及させていくことも必要である。
- アカデミックライティングについては、能力別だけでなく分野別に行うことが必要である。また、外部委託するよりも学内教員が担当することで、アカデミックライティングやアカデミックプレゼンテーションのノウハウを学内にストックすることが必要である。